[illegible]

[illegible]

[illegible]

帝國圖書館藏

蘇柯翁像

倣傚諸六家集所載之圖　烏巢

謝蕪村傳

飯人子　撰

元禄以還。俳歌者流接踵而起。不暇口數而指僂也。然其吐嘱豪放而奇警。飄逸而洒脫。時借古詩。巧出新意。不襲他人牙後一字者。無謝蕪村若焉。蕪村本姓谷口氏。名寅。摂津人。為人磊落不羈。家近毛馬塘。与渙夫白丁締交。時被酒歡噱。生計漸窘。妻子告饑。笑曰。我且為釣徒矣。乃出鬻其所獲于市。以給食。嘗帰過酒肆。異香衝鼻。不能自制。傾囊立引數太白。陶然而歌。妻子交讁。不顧也。性好讀書。博渉稗史野乗。又善画。宗黄大癡。甘於俳歌。初師宗阿。後從早野巴人於江戸。為入室弟子。既而歷游奥羽諸州。遂入京師。住一乗寺村。弥

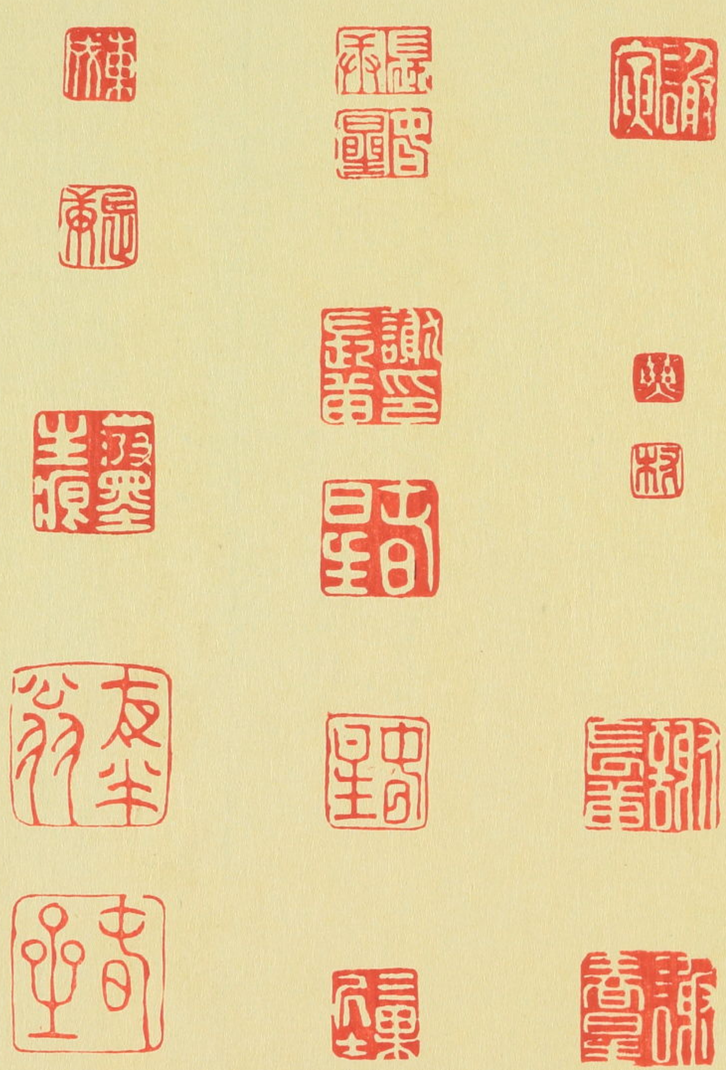
夜半亭。蓋巴人即世。號其弟也。平生高自標置。眇視王侯。遠迹望其風采。爭来執贄。画則吳春、九老。俳歌則几董、月居。皆一時之選也。於是蕪村之名著于天下。蕪村常語門生曰。世之論俳歌者。動輙立門戸。縱慢憎。或容。或不容。我則異於是。英雄可容。兒女可容。神仙儒佛。木魅山魈。無一不可容者。要在俗脫俗耳。果能脫俗。所謂聞隻手聲之妙出矣。是他彫而禪者非耶。本人情。通世故。樵夫謳焉。牧童歌焉。且多識禽獸草木之名。是俳歌而詩者非耶。画論有云。名家不立門戸。而門戸自在焉。廣求藝苑。旁訪才人。以為吾藥籠中物。随收随用。我於俳歌亦如是而已矣。蕪村於画亦得三昧。与池大雅

齊名。喜作山水人物。筆墨酣暢。有兎落鶻脫之概。識者竊惜其為俳歌所掩也。天明癸卯。冬十二月二十五日病歿。年六十八。葬於一乘寺村金福寺芭蕉庵側。庵芭蕉翁嘗寓処。配某氏生一女。婿名不傳。京師人寺村百池。蕪村之門生也。慨其死而無碑碣。謀建之。不果而歿。後明治壬午。值蕪村百年忌辰。適百池亦丁五十年。於是孫百僊。捐貲建碑。以成其志焉。所著有新花摘、七部集、蕪村文集、蕪村句集。其生之地屬天王寺。以蕪菁名。故號蕪村。蕪村字號甚多。曰長庚。曰宰鳥。曰春星。曰三果。曰東成。曰四明。曰碧雲洞。曰白雪堂。曰紫狐菴。曰諧日菴。蓋臨時湧稱。亦可以見其為人矣。

飯人子曰。蕪村者畫師耳。俳歌師耳。而畫之与俳歌。識見超卓。厭倒時流。其襟度快活。塵芥名利。嘗游丹之与謝湖。愛其勝景。嘯傲忘帰。曰。我死即埋骨乎此。遂更姓与謝。後修為謝。明末柳敬亭。本姓曹。少時無賴。困甚。以演史遊。一日過江。休大柳下。撫其樹曰。嘻。吾今氏柳矣。後二十年。金陵有善談論柳生。車馬輻輳門前。則嚮年休樹下者也。其事殆与蕪村相類。亦奇矣。嗚呼。蕪村死後僅一百年。而其履歷不詳。子孫無存者矣。然流風餘韻。使後人思慕不能已。豈可以尋常畫師俳歌師視之乎哉。

古筆の
游泳自在の
一人見る者

しらるゝ
用意深くして
筆二



六十七翁謝寅字

東成謝春星

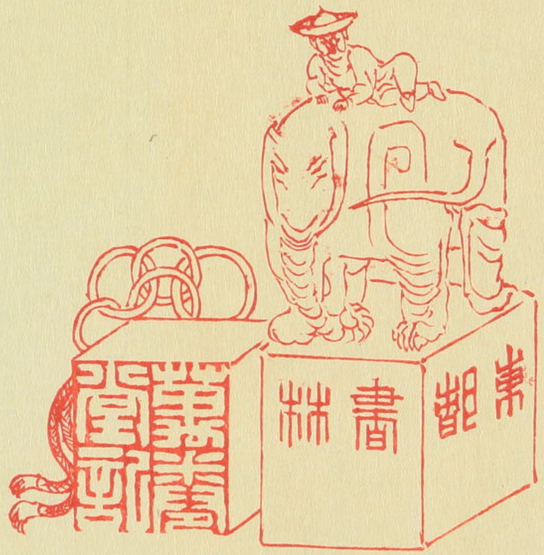
夢ゝ多ゐ白髪拾遺

春の部

歳旦辞

歳旦をたゝる新たなる俳諧師
ものつや杉もふる木をミる新
大和ゐなる何来の
ものゝ本郭の賀こ

大和俳石いの宮を思の筆如
俳ゝ本人ゝ宮なゝ中盃下り



撞木早こそ西の空ひさ
梅園を禪川去る郎
蓑生の古葦にそうて梅二輪
御所の名の和時あり京のこわり

春風馬堤曲

春風馬堤曲
馬堤八毛馬塘也大阪東成郡
毛馬村にあり菜菊の敵国也
若幼時此堤上に登りて
戯つる由その文集に見えたり

菜の葉や浪花を出て長柄川
春れや堤もすがら家さそ
茶店の老婆子儂を見て
慇懃に茶を煮て出す

儂ら春衣を着ぬ

一軒の茶屋の柳老いたり
閨の戸の火鉢わいさぶ
海苔搔ふるの一重や朧月
伽藍さびたる人なきの門や朧月
却ほろ物や人今矢るの国
山寺すやつまさこなるの鐘こあるも
唐こまを洗ひて渡むや春の水
春の水山なを国を懸れり

烏帽子着て浮世や渡る春の雨

栗飯一椀の為よ世十年の

歓楽をむさぼりつくせんとうい

菜の花に出て戦れぬる

て強らぶこなりんるるる

去るものや菜の一さにす蝶の夢

捨り残す田にしの春の冬の邪

畑打やあるぶ人えをられる

鋤の賛

畑に田を打ちの鍬やの振るを

雄子を手を帰るあるのはを

帆風のふと一流さん春の海

涼しく時をなきの蛙の

鳥出るの草庵をとき蛙の

沙の和をとまして眠ることの

咲ひらてる歓の橋人えをうう

山寺の冷飯をき橋の邪

嘆にも数をを発てを山橋

在こてる古都と花の春の雨

陸口悔の作文

草刈て春をうくる花の雨

雑如弱や紙衾を捨ける

りんの花の屋くる掃ふ雨哉

笠帽の賛

檜笠辞

花散て木の下闇や檜笠

宇治白雨をたもち牛角

嵐雪にいろうて十四人の俳

仙を屋敷てあらるるに賛

羽織こそれて

花散て月冴て文殊さながらかな

花見る児

春もやゝ名残うしとて

甘茶の花を僧の脚絆のさうりに

甘茶の花に宿をまもれ夫婦舟

山吉の南もいろ春の雨

紫の戸ふかれかるる夏
雲をうつ紫のさとアたちさん
法華の珠数まかるるや　松の梢
りけりやなまくさ琴の抱こち
る燭ーてうたてさんや春たち却

夏の部

西行ゆ
あれくふ花の下にて安死せん
その二月の望月の頃

あの在角まちまち嵩のもり郎
更衣毎なんへ毎毎氏こんり
あの在毛康の星人ゆーしさよ
小百女の五人拾ーて拾ー郎
西行ゆ和たそとなーて拾ー郎
ほまくまん高ゆ也拾め中なる
耳ーーよ文入道や　杜　ゆ
箙たーー去熟の星たち時ゆる

閑古鳥はいまゝの白ふちをむしりぬ
ごッゝゝと傳都の廣やかん行
切くたさるもの形きよりも閑なる
潅佛や彼とらを願いかりのと
年月八日死してはるとゝ佛
日光の土にも飛れる牡丹哉
不動画く豚麿ちゝの牡丹
金屏のうゝやゝとてゝゝ
南蛮彼とと牡丹の寄やく福寿寺

ほゝたんやちゝはの猫こうねの蝶
牡丹なる寺りをうゝゝの邪
切ゝ二十日月も乃り牡丹可南
方ゝるゝ雨ゝ毋の牡丹小
ちゝ草も刈り捨ての家の牡丹
深和の汚ゝちゝむ牡毋の邪
山蝶の雨貫ゝる牡丹の形

蟻塚

蟻ゝ宮ゝ集刑ゝゝゝ牡丹小

巫女男に
よりてめすべき人絹をかぶ
りてすべし

嵯峨野

[illegible]の[illegible]て大井川
[illegible]か[illegible]や[illegible]植の[illegible]
[illegible]花の[illegible]
[illegible]の[illegible]八[illegible]の[illegible]八[illegible]
[illegible]や[illegible]山の[illegible]
[illegible]
[illegible]山や[illegible]
巫女男によりてめすべき和歌

白うねの
上立女房の下[illegible]の[illegible]
や井出の里[illegible]

少将の
玉鬘の[illegible]
きこの[illegible]
あり念者八男色をいふ

和の[illegible]
金[illegible]
白[illegible]
白[illegible]の[illegible]井出の[illegible]
若[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

蕎麥や草庵作る兵等
蕎麥さくらや左右にこの泊宮
をちこちに淋のそろひ蕎麥かな
山畑をわるはせ行　夏の蕎麥かな
般若むかしの日の蕎麥かな
夜さむの帆にあぶれて蕎麥かな
蕎麥切人をみさき若狭かな
淋河の西し来す　夏の蕎麥かな
淺写る山畑の中　乃至の蕎麥

鶴岸寺ゟ曽寺を行ゟ初鰹
初松魚鰹世太夫ゟ　居ル
影　学寮
為せ半紙魚を拂ふ窓乃前
賣ト宝来の下宮の汚れ新
遅て日の中ゟ宴に
月の匂を仕てゝらん　鱧乃腹
魚を高くすゝる人乃七面点
魚匂を乞てゝ向ゟ

小則潰佛塔の国をぞ
梢を放つ後去年たちの
白髮まるのみ去年牧帳
そのまに仁王奴婢法師
腹あしき隣国の牧を
朋易き拍や稲妻の鞘走り
筆や五助畠の麦の中
卅つるや垣のまもを不動堂
塔吟ふ我ならまの細き
筆をとる赤くなる前
若卅や十四の頃の恋の
若卅や昼寝まもなき中
ひとり卅や村百姓の麦の
麦秋や鼠鳴きまる長きと
麦秋や稲の根元ひろう
むき秋や狐の足ぬ百姓
むきの秋淋しき白の粉ぬ
麦刈て瓜の花をつ小家

飯盛山狐塚の前や麦の秋
世界遺産熊野参詣道人なつかしき麦秋
鮒つけてゆらてきたなる魚屋かな
鮒すしや長崎の味に雲かゝる
鮒おしてたゝは淋しき心の奥
鄭をおすかし酒磯千隣一家
すゝたゝぶすゝ石上に行たゝ鳥すゝ
古し一桶を洗くゝ流き淋魚小
生小たゝけの米一升や鮒の夜一

卓上の鮒に眼を閉し観魚亭
すゝの石に子夏の鐘のひゝきかな
寂寞と昼間をすゝのられかな減
さゝ梅や微雨の中行飯煙
さゝ梅やさゝさゝさゝ豊後橋
青梅や捧心の人垣を間(ヘタツ)
かけ行の隠れ住ふ砂れ今
柚のもやゆゝしき母屋の乾隅
柚の花やさゝ酒菰す扉の内

夏山や
ちらにさそハ白幣也

橋やむこうやつるの弓矢取
夏山や神の名さすにきて
立山や京をしるかるかも
麻を刈と名をのこす鎌なる
めなるかるかみたるるかるる
酒を売る家の女房ちとはれ
ものもやかまるつの宮
渋柿の色数る里と成にけり
柿のそこさふ数しそ黄ばべる

床低ふ旅の宿りやそてる
月やゆかをを働く渚あ
夕月やあに銚子をしをあ
濁酒ふ移りの手ゆ結ゆ出月
攝津ゆはしく行りや泉雨
ちちみ移ちくるるる陸桂
泉平面や宝寺祢の社郷清
閑伽桶ゆ何のむそるちる
あらゆて小あるれむ出月

五月二日の頃なれば岩根
苔国さつきふる雨ふる草も沈む斗り五月雨
ちらちらやあふぐ蛍一つ
さみだれや名の通りの径を人の行
五月雨に尺とはなれる縄
紙燭して廊下をゆく五月雨
五月雨のかくてそなりぬるかな
討ちそなる桃倫ふるて夏ゆく

あちこち原田に苗乃みどりの郭
ゆくやとて娘もちらつ四桂ル
鴻ノ巣かけの伯母もあれて田植ル
参河なる八橋もちらつき田植ル
四国ゆくそなる中おの四桂ル
夏の月田のあちこち孔ちらつ
獺をおしなるも清ふ田桂の郭
おその住むれも田に引ふ苗ル
ゆくや法ケのそなるまさて庫

蕪さらの下陰ささる田草取
蹇のミ結もかてや蝸牛
つゝ越ゆる蟻車や蝸牛
黙滴にうれてこぼるゝかつゝ
からつゝ何ふ角の長短
魚の名を尋ねる物ぬし
味噌汁をくらめ娘の夏ぶ
たゝきて拂ふるもの松の郎
ぎを洗ふ千兵船や夏の月

家ふりて懸尺せる蚊微ル
木かくれて名蓑のかの懸かぶ
口ずの方の方や日にうとき
米屋一間ぶ
やさしさよ花咲く白の串
蓑を脱て火串に蛍の焦る
宿ぶて火串もけぬ雨のひま
射干して啄く近ぬ鳥ル
二つやそも火串に白き蛍尺

二つやそも
此五文字一に蓑ゝに
作る

彩雲の
比二句ハ孔雀堂に
出せり暫く原本に従ひ
てそを載せ侍る

岩根に住む木暮ちる山寺の雨
久しき水のうちそよ年ふるかな
袖笠に毛虫を忘ふ古御厨
我が家に僕一家の柳の毛虫
彩雲の毛を吹つる毛虫哉
朝風に毛を吹れ行る毛虫哉
禪に團扇まゝる亭主哉
汝煙消えて山より月を涼し
出羽のふすり陸奥の方へ

面りけるに山中まで月ぞれ
りれは辛うして九十九伏衣(ヤレヤブクロ)と
云る村にたどりつきて宿り
ともめ夜ぶらとをゝ
物のあはれのいくあるそれハ
あやしくて云いそ見たる古ち
の廣庭に知らるをまこのまゝ
をつくりてありけり年を
とら雅個一けるた月孤

峯の頂をてらし給ふ千年
の外を照を朗詠のけしき
ふかきうちに叶をのこす盃
の景をとりてひとかくいて
那由多のあまをゆのてをより
てみをかとふをつをの
兵庫と云ふ

宗阿しさに麥を月夜の卵を乳
宗阿三十三回

五重の雲三重にかさねてさの岩
五重の屋の主河朝臣頼を
たゝい居を流来にうつす老
と橋を下せは野の川瀬に衣
をふるい右に檻にすれハ白
河の下流を見を濯く宝殿
法城のけさ〳〵にも住めハ京
きるその中に命をくるある
住居をうりう

浮草の花押されて白の宿
夢のにうぶてくれ一元の貞

夏賛二句

夢のやゝ鏡に息のかゝる時
夢れて尽くさぬちきる夏の

秋の部

病起

蚊帳にて思を答うつくしき秋
秋の蚊帳あて許にすこしり
思百や吾に秋を思い出
穢多おて清えぬる切花
古くう屋の切花これう書の秋
細腰の法師おちに踊りり
錦本の州を見うて踊可事

猫ら画峯のたまもれと
枝ゑハ村か砧画也

節も婆も猫も枝ゑもとろふ
稲妻やこちこち剣澤
頭ら家にかくるや角力取
古んの咲ひにみるらめ角力取
萩咲て玉田搭やくふれり
黄菊や萩手鼠の立る茎ら
油臼ーて嵐にあゑ那ちすら

太祇十三回忌

線香やますらの芒ここ本
兎角ーを一把に折られぬ芒
梦ゑ路の秋我うーちより人や来る
彩にやゑる人ゑふあるや狐火の紙
衆ゑ為ゑや烟のつくふ沢ゑ繻
丘づきのつるちして角ら
芒ゑ

狐の情ゑに化る扉に
つるゑ家ゑ角や黄ら玉乗の裏借氣

人を取る測りなかりし霧の中
長年ちつきを本源に帰る
初汐や朝日の中に伊豆去捐
自然を賞めそぶ実あり実なりけり
蛍に月を碎くや夜すがら

宗祇

宗祇を座ふ秋屑を月の光
宮の衍をめぐらせて廣の新
思ふ廣や伏猪の根もと

江湖に釣の糸ふく秋の風
思ひ出て酢つくる伊と秋の月

画賛

秋風のふくひ倒す障子哉
一つ哉のこり白菊そはの色
る狐のこゑれ新ちる紅葉
綿とる中大を宗祇に追ひ
棒突いて庄屋を名ふ哉
ぬるやんを鶴のつる 懐れ

江湖に本集にかゝ一さやに作る
俳諧古家集に入海る
の像さくものて江湖と
ありなお白花

山賊のさとりて出くる野辺の郭
掛稲に鼠鳴く門田の面
白菊や色に染まりて島の内
枯枝に鶯鳴くなり苔の衣
菊山や さてもさてもあり柳もちち
家々に月毎の雪となりこれり
竹実も中に菊の花の匂ひ
大文字に思ひ出でもなつかしき
油買うて戻る市の家鶏

手燭してよきふんぬぎ秋ぞ
心にそめし草山城の能所
宮仕行三句
君見よや桔梗の草の露五本
鮎釣りていよいよ高尾の郭
鼎をさく琵琶の調べや秋の夜
雞頭の根もつゆ中お菊かな
終夜乃九のもちする月まては
地蔵菊郭公

腹なおしき僧も餅くく城寺哉
行舟や秋の月まくまろまる
小秋のやおくやしつまるやら
庵をたくく狸と秋を惜こゝろ

冬の部

時雨るゝや用意のこゝろ午餐
朝日の影うゝ時雨の雲しりすと初しぐれ
絶えくの雲しりすと初しぐれ
堂下の外に来あて時雨るゝ
仏さらは午かけ寺の時雨哉
惜草の笠ぬれぬ時雨哉
塩竈の上をうらうら行時雨
ふるあるとて烟代の郭

冬やことし
此の五文字一に今歳の冬に作る

冬やことしよき衣きたる坊かな

冬籠燈光虱の眼を射る

戸に犬の寝がへる音や冬籠

屛風の牡丹めでたきふゆごもり

狭奥川の瀬うつしきけぬ路

炉開や先あたらしき母の顔

村々に音川まふ千鳥かな

凩一陣冬の白く見ゆる哉

冬の夜や吹きあつめたる山颪

冬の夜や提灯もらふ西の京

大星力弥の賛

月よさてとりまぎれたるや冬の梅

柴かりの榾置にさはるや枯尾花

日あたりの草木ならしく枯にけり

炭團すゝ棚の蓋見つけたり

てらてらと
本集に蕭條として石に
日の入る枯野かなあり

てらてらと石に日の照る枯野かな

山を越す人にわかれて枯野かな

畑にもならでかなしき枯野かな

雪の鰒鍋乃上に舞ふて
生ぬ抜手や鍋の上乃 捨つ中舟

大根の画賛

就ぬ大根のひけつらせよ土大根
雪乃手もすえて はき抜ぬ
大雪ぬ降ぬ降ぬ 雪の戸ぬ
ぬ中 ぬ ぬ人にすぬ
八幡 乾坤 彷彿 て ぬ 梅

古丘

乃仙に 孤抜ぬ 百日 抜
鉢ぬ ぬ ぬ 蔵の 乃 ぬ ぬ
抜ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ 鉢叩
陣 ぬ ぬ ぬ ぬ 乃 都
中 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
乾 鮭 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
ぬ ぬ 鮭 ぬ ぬ ぬ ぬ
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ
ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

鐘を撞て敵を懲(シキミ)て軍機を破(ハミ)こはす
宇治垣敵や上の里迄寄うつ
宇治垣敵に屋を焼うつ重
山風一二の鉢(モリ)の懸この形
茶吹く風を起す小手ぶ
節平候寄うつ雲白表ふ
武士のうや面てすれ共表
野蜘一い障ふに羽折ぶ

土器壺賛

面影もわすれ〳〵とその市
ゆくすゑのめさまし草や茶釜壺
ものとの女歌多侍や和の梅

無学白系拾遺終

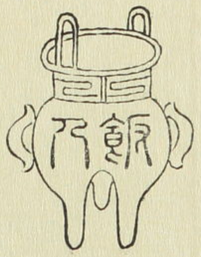
丁酉一月元日熱海寓居
にて試筆
[illegible]主人

梅林の花さかりなれハ一林さき
葉いつの実いつまて梢も落ぬるを
実と花とを得てこそ学ひに
とてあそふも学ひの根本なる
先翁ならし翁の化詩まくらしく
母もまた色せまた詩人のをかしみなり

そなたの白い手の指の美しさは
春の白菊の花びらのようなさま
そなたの白い顔の美しさは一なる神の
御心の小槌しるしみまもる
まことにあるべき形なり
神のみまもる白いさなめ

そなたの美しい新しき衣を着ひ
あつめて回りの方に新しき
そなたの美しさは光をつきぬる
美しい小槌ふるその白菊の巧を
しるしぬ美しきそなたの姿
ひらむ

四位三十年むかしをもつて
書ふるのひろ　飯人像



東都
書林
神田表神保町
萬卷堂